春宵弓張月

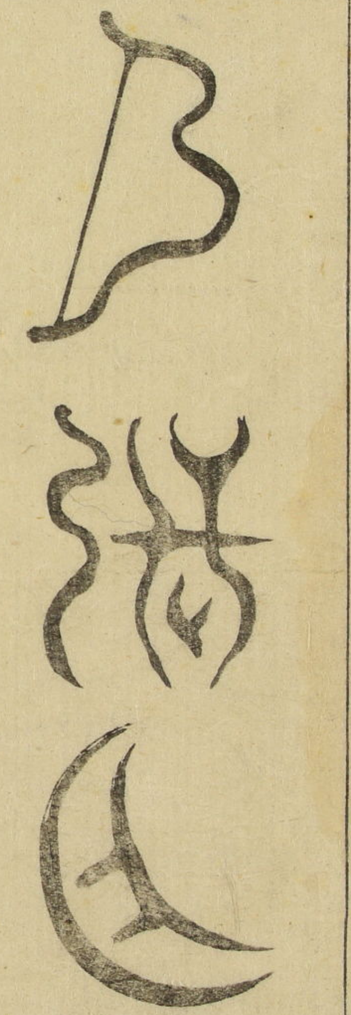
前編

六一号

へ13
3692
1

門 へ13
號 3692
巻 1

曲亭翁原稿 西馬老人綴



東京書房
文昇堂熊谷梓

流行の變化やまちく古躰を見れば松柏の色多きは常に
古今老若出でいくばくさまは流行の繪冊子も滑稽もそれと復讐
ならず。あまた江戸に移る歟又當頃の續き物もあまたび小子等ぞ
拙文漫筆を綴らんとて先哲の妙作を摸寫すと書房も好きてよりて
の弓弦不縋る島夷をもて筆乃ちくもあり磯の及ぶる事を三歳さきと
草稿半にして等閑にして旨年より頻に矢を催促實に爲朝の弓手
長くとも短き物ぐき摺乙保笑つぶは射るいらぬ矢中てはいと遠き的場
ゆゑ。八つのくりせんと。禿毫の穂先の錆を研支光。

嘉永四年辛亥初春新鐫　樂亭西馬誌

久しうさは
てをゆふ
行水
糸を
よりて
南の
くるる
なつ紙
とりぬむ

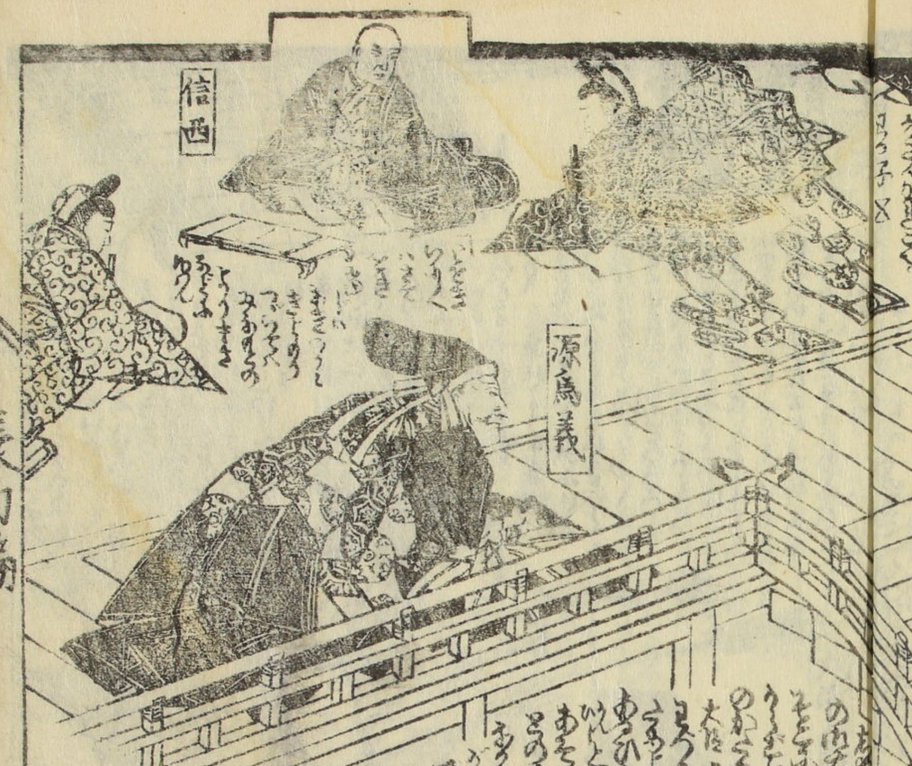
鎮西八郎
源冠者為朝

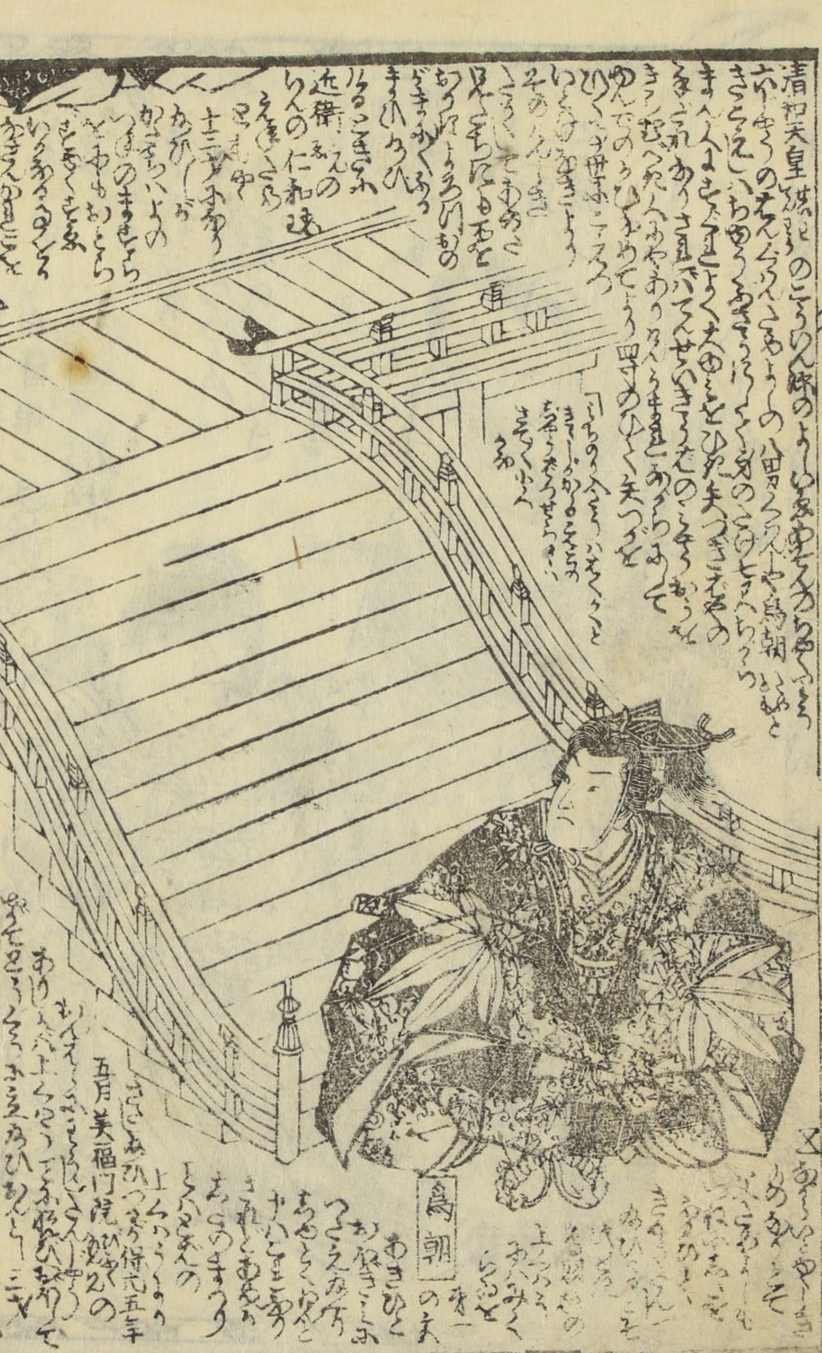
阿曽
三郎忠国
愛文
白縫姫

大鳥郡司
三郎大夫忠重の
娘 鶴江

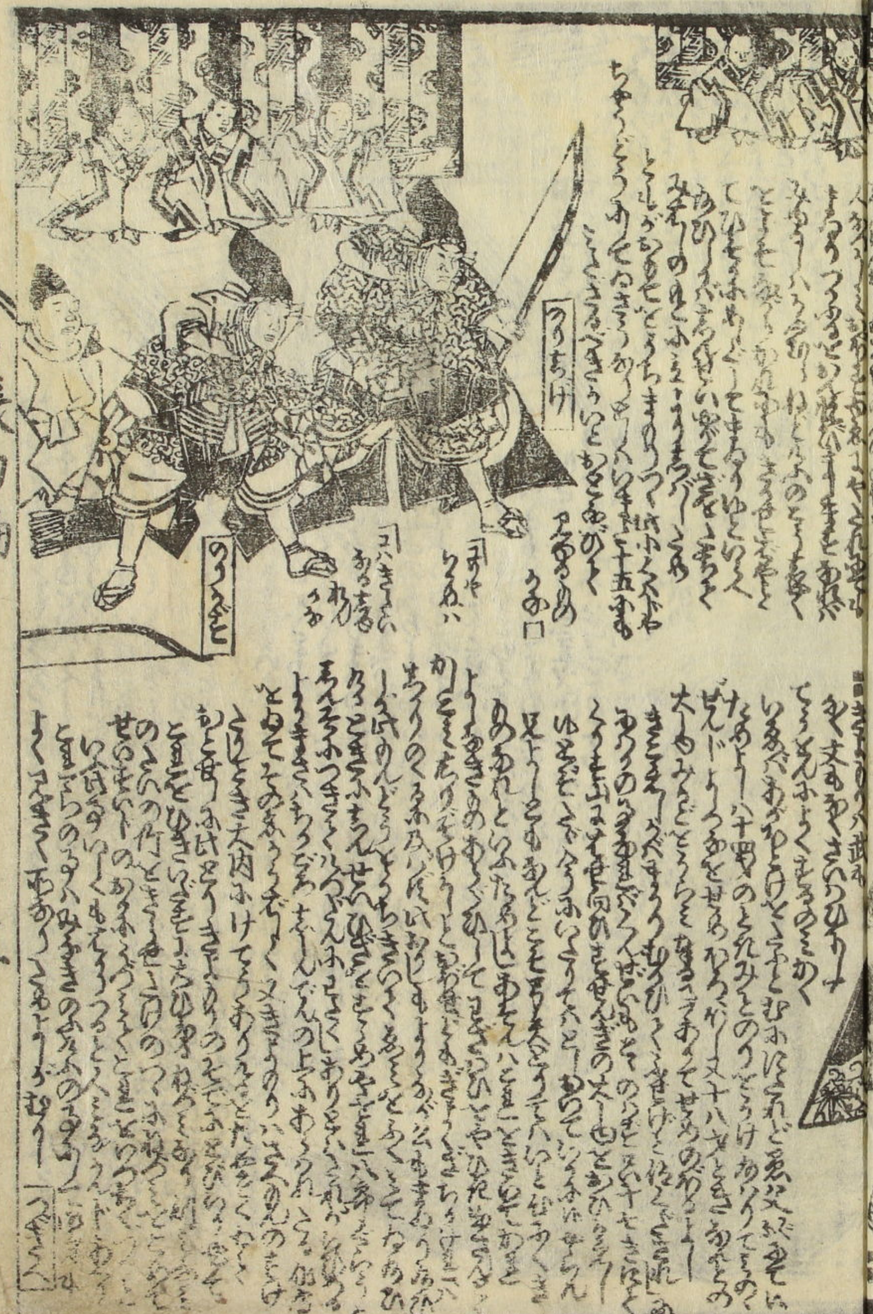
琉球国
尚寧王中城
寧王女

紀平治妻
代
源氏名の
ほのぼのとあけ
武者ろく
庭のゆきぐち
飼根野風
紀平治
八町堀の
大夫
飼根山雄
白鳳姫
婢女若葉
肥後
押領主
河内
三郎
忠國


信西
源為義

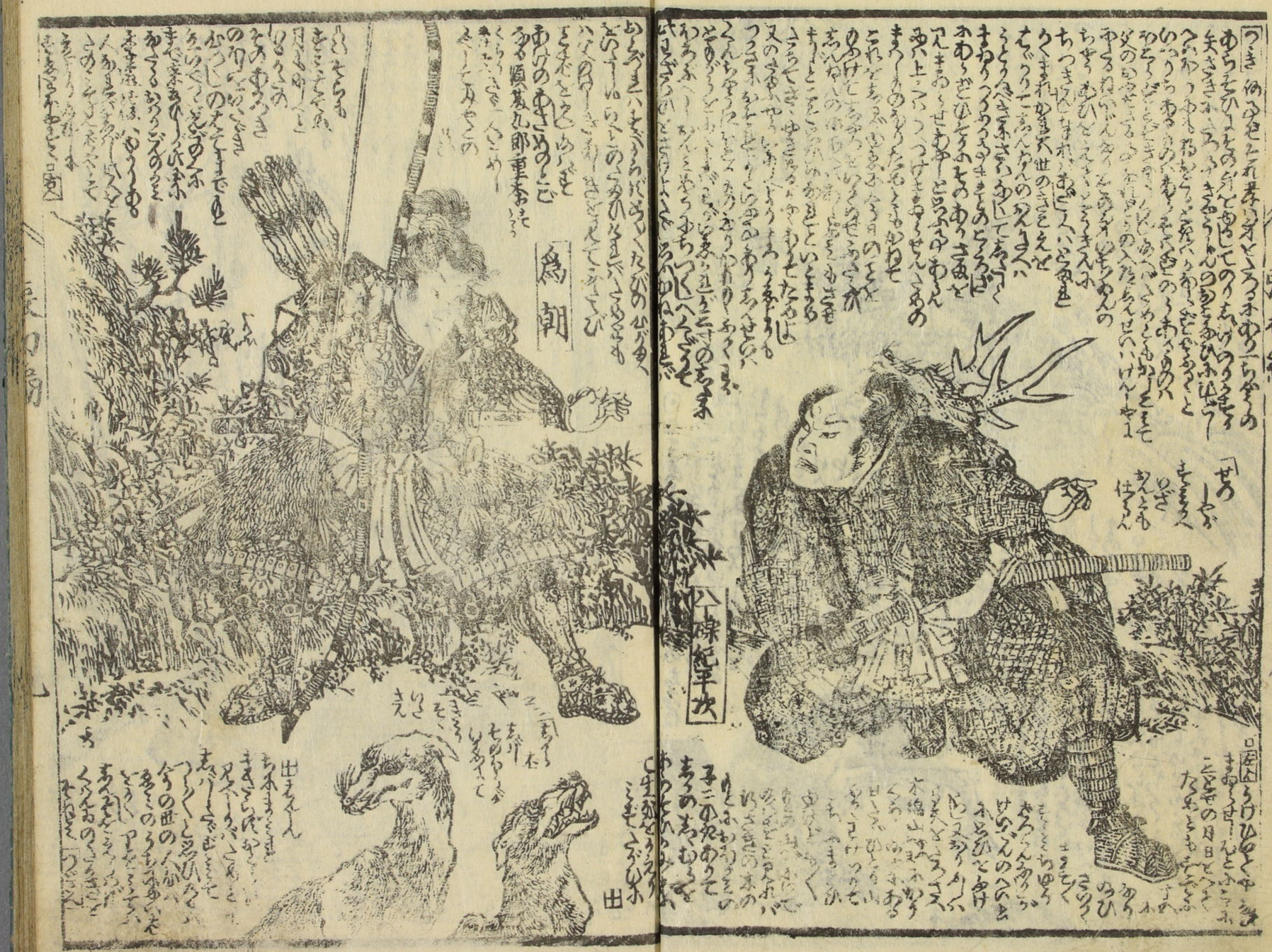

高朝

八郎爲朝

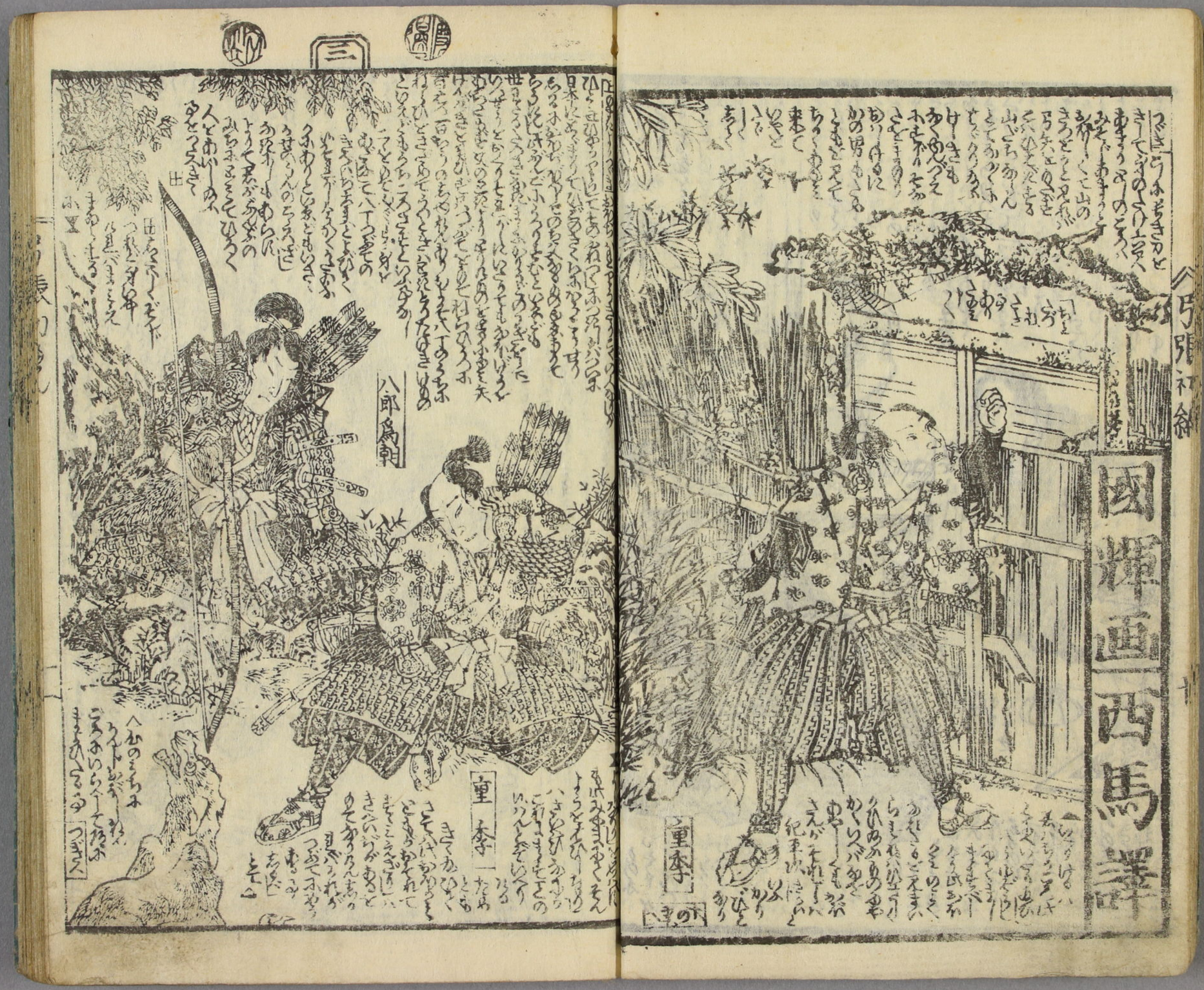


烏義
烏朝

須藤九郎重李
八郎爲朝


八十隈紀平次
為朝

八郎為朝
妻八代
紀平次


國輝画
西馬澤
八郎爲朝
重季

重太郎
山雅
頼光
山をあらしとうえ
まくきさぶく

九郎重李
八郎爲朝

八郎爲朝

為朝

紀平次

紀平次
烏朝

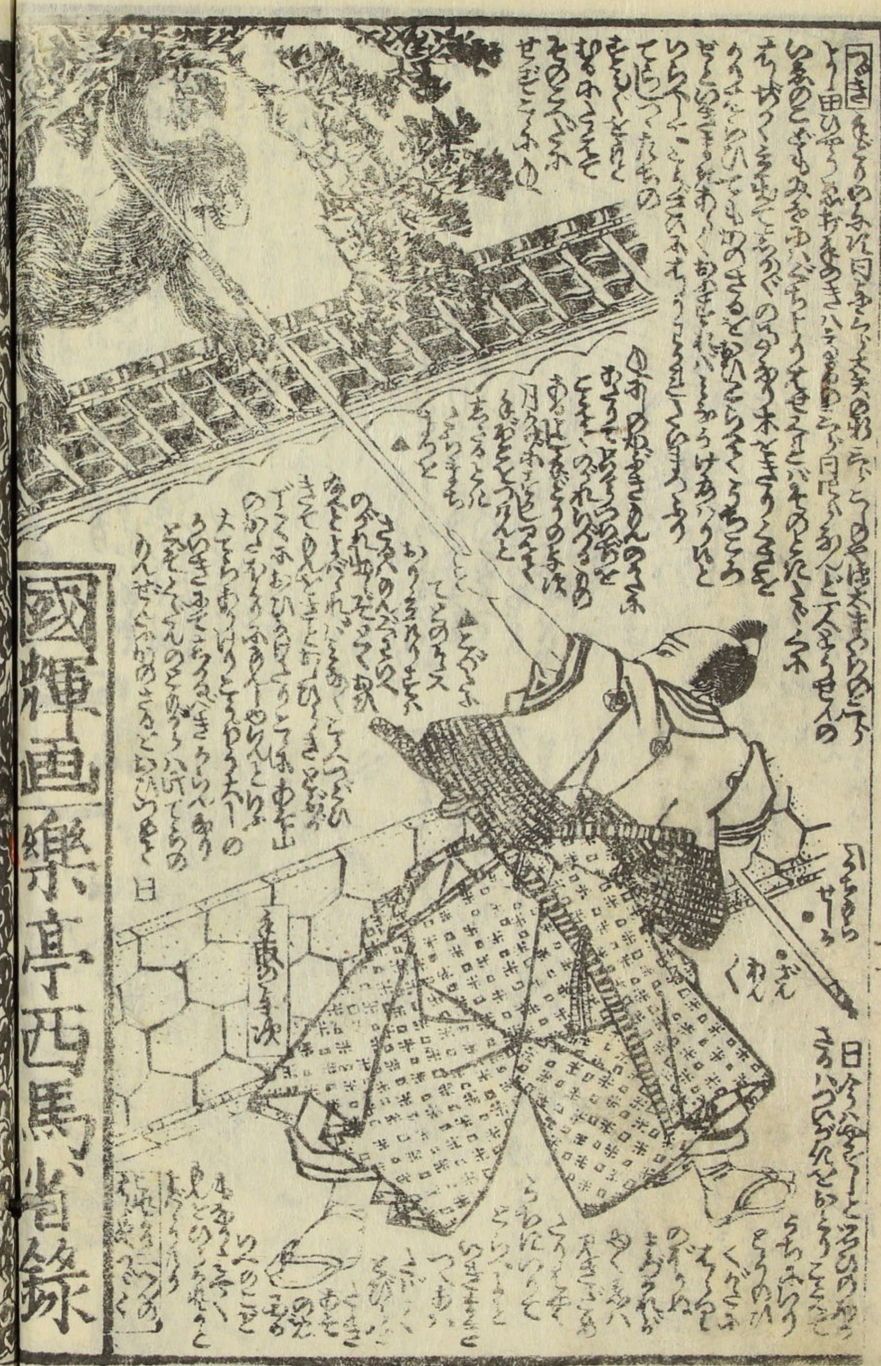
烏朝

白ぬの姫

白ぬし

葉公龍を好んで画くこのえども寔の竜と視て驚怖せりといへるが如く多くハ其道の面目を知て實らんことをもとめ只世ハ官に因るや去ハ往昔の左り甚五郎或ハ飛騨の匠の彫工亦古法眼金岡の名画倶ふその如ありて末世迄も奇談と残さ出田也ふ木林四維萬象そなへ細工の密れなども更に如何なる事と聞ん事あるを利ふ可き欲ふ泥い故ふ愛に稗史し著述も古人の編ら是ハ後世まで行まつく翫完さるべ・よりて短才愚闇の拙作ふ三文も小きを府をそこうとう千金方の先哲が高能とかりて鐫交と世ふと梓行の進めふまを先年註文ありて稿完せ・弓張月ハ初輯今春歳市とあるに本の捌方あんばいと・ト時花言葉の圖ふのりて流行不合の僕も梅子あんでいどでこんせ・ト已が天窓之引攘そ・夫より外趣向も出ふ忘れ時分板元のいつもかるふ若狭屋ふ二編の序ふ出音聲ハ後とたのむ老れ坂土堤の蛙のかをく聒き御需と覬支ろ

嘉永四歳辛亥孟春新鐫　樂亭西馬述



佐土五衛尉重貞
大野の捕人として
石山の奥なる温泉へ向
鳥朝と生ぐる
八郎
為朝
夏風や
清水ながれて
うら見たり
宗因

恩思徒武藤大
烏朝室白縫姫
何誉軒

虹陽廉夫人
狩野介工藤茂光
大島流人八郎烏朝
国師
蒙雲
虹山の僧

社者鳥朝

不許葷酒山門

冠者烏朝

おまの紀八
阿曽二郎忠国
高間四郎

忠国
白縫姫

冠者為朝

白ぬひ姫
冠者為朝

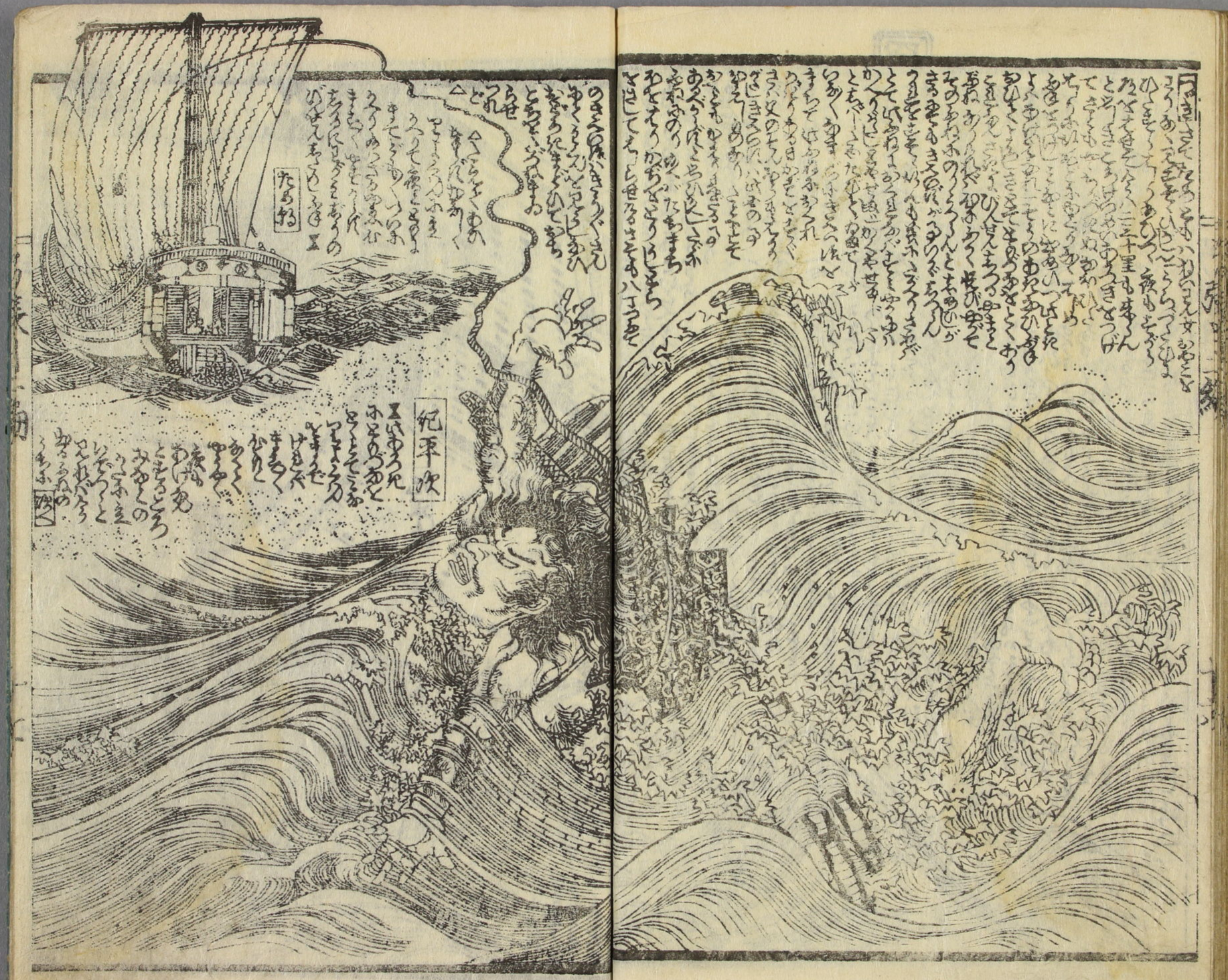
入道信西
判官島義

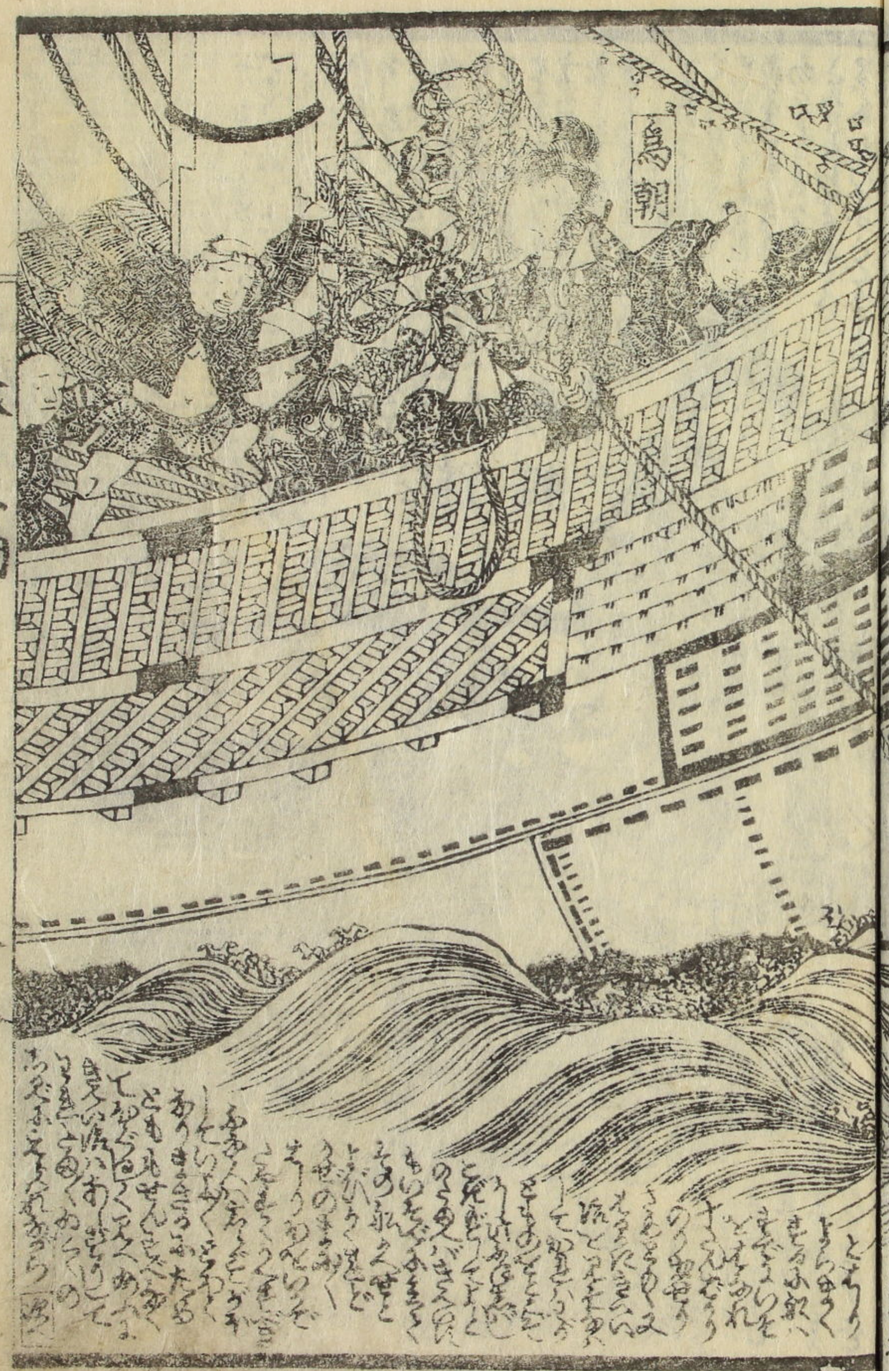
烏朝
白ゆひ
紀平治
高間三郎
阿曽忠国
手野の与次

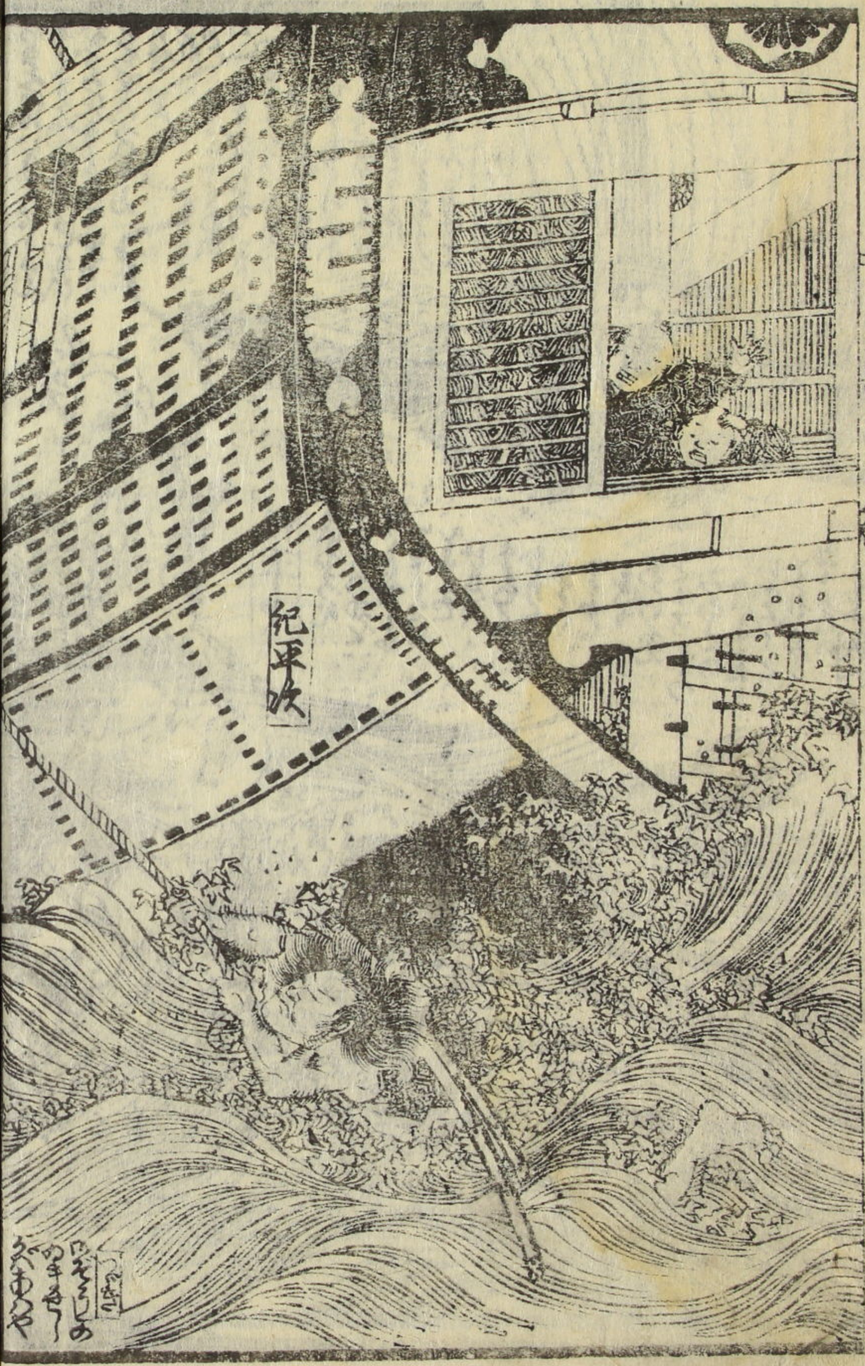
國輝画譜

西馬省錄

寧王女
鳥朝
簾夫人


紀平次

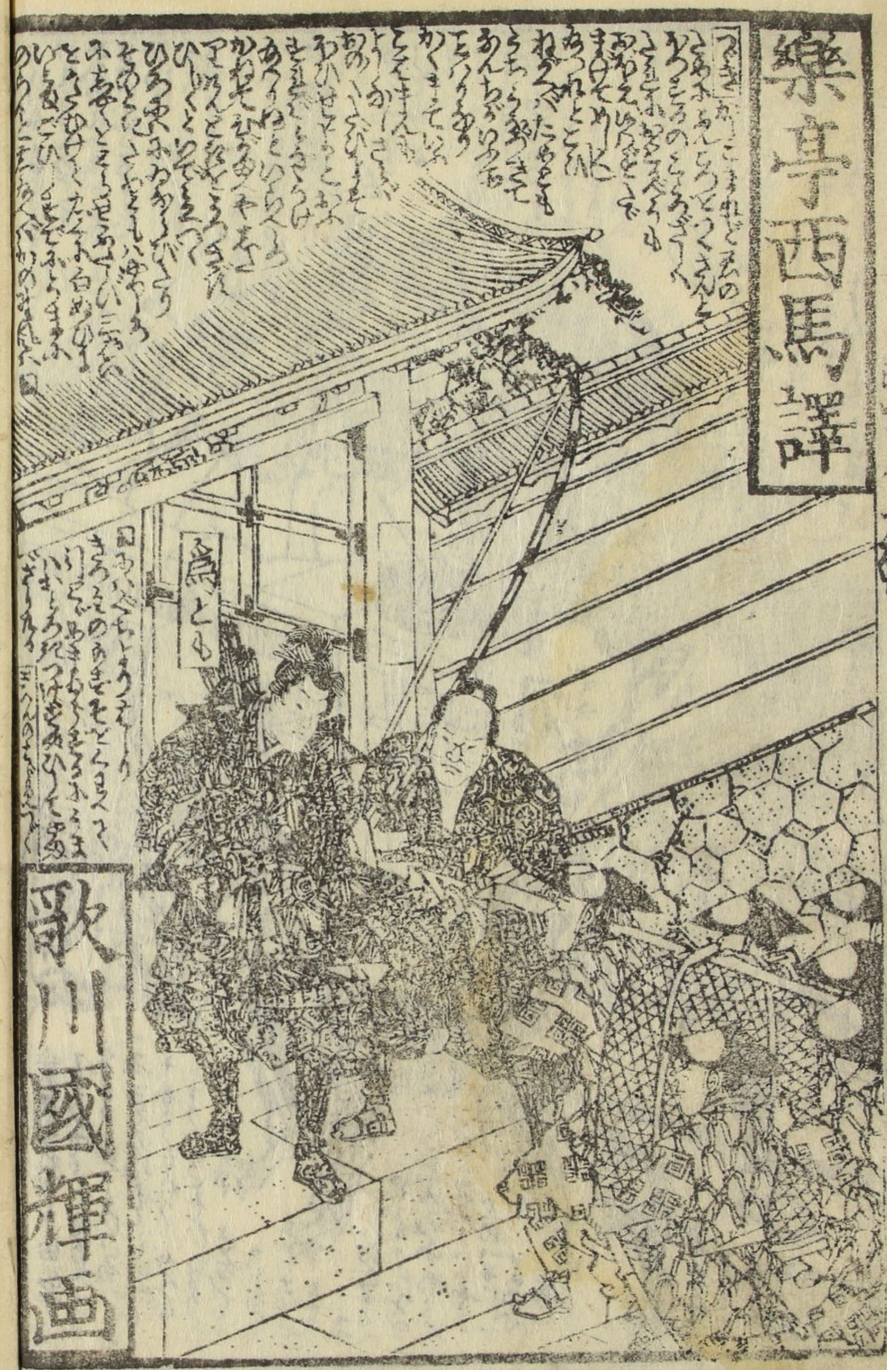

鳥朝


紀平次

白雉姫
鳥朝
ひくがてらけものとり
ばいでのひ

紀平次
白ぬり

樂亭西馬譯



歌川國輝画